

「一つの新しいものが生まれる」ことを
傍らで感受する人

牧葉りひろ第三詩集

『黄色いマントの戦士たち』に寄せて

鈴木比佐雄

には、教育者の視線ではあるが、それを超えて一人の人間存在の可能性を直観していて、その驚きを率直に書き記している。この詩は牧葉さんが心に秘めている教育観であり、人間観なのかも知れないと私には思われた。

青い嵐

1

牧葉りひろさんの第一詩集『青い嵐』、第二詩集『緑のひろがり』を拝読すると、家族と教育という二つのテーマが浮き彫りになってきた。とくに強く感じたことは、自己を厳しく内省的に見詰めるながら、自分を在らしめてくれた父母への深い愛情と感謝が語られていることだった。また教師として接する子供たちや我が子の誕生を通して、人間の本来的で素直な感受性を発見して、その宝物である存在することの感動を書き記そうと試みていることが理解できた。

一九八四年に刊行された第一詩集『青い嵐』(二十九篇)の中のタイトルになった詩「青い嵐」

弱々しい
少女のような笑顔は
急に

針のようにとがり出す。

汚れを

はねのけようと

身を守るかのごとく。

そして、突然

人を馬鹿にしたような

高い笑いに

顔中が崩れ落ちる。

彼の細長い体は

疾風よろしく

はねているかと思えば

次の瞬間

まりものように沈みこむ。

嵐だ。

だが少年は知らないのだ。
力に抗され

教師である牧葉さんは、少年期の刻々と脱皮しながら成長していく姿を傍らで眺めている。その特長を牧葉さんはその甘酸っぱさと危うく脆い姿としての確に表現している。そして少年の存在に寄せて、最終行で「一つの新しいものが生まれようとしている」という可能性そのものである存在に温かい眼差しを注いでいる。さらに真っ只中の当事者たちは、「だが少年は知らないのだ」とその可能性を自覚していない「青い嵐」のような不安な存在であると語っている。そんな可能性を肌で感じることで教師は、少年期の子供たちに「一つの新しいもの」をどうやって気付かせることができるのだろうかと思ひ悩む存在でもある

のだ。教師の言葉一つで子供の可能性は伸びていくはずだろうが、その可能性を摘まないようにとの内省的な自覚がこの詩の中で貫かれているように。教師とは子供の多様な可能性を発見し、その可能性を子供自らの生きる力へと促す存在なのだろう。そんな教師自身が絶えず問われている、教師の内面の格闘を牧葉さんの詩から感じ取ることが出来る。

第一詩集の中には「江の電旅情」という詩があり、この詩を読むと牧葉さんがどのような思いで教師になったのかが理解できる。

江の電旅情

しっとりとした色づく軒並の間を

狭い電車がぬけていく

チンチンと鳴る警笛の音は
数十年前を今に戻すよう

「江の島駅」を過ぎると

やがて海に出る

緑づいたおとなしい青の広がり

海に漂う小舟が二、三

貧しさゆえに

小学校しか出られなかった母が

修学旅行に来たのがこのあたり

なつかしそうによく歌っていた

「かまくら」の歌

「稲村ヶ崎」「七里ヶ浜」を前にして

「鎌倉高校前」で電車をおりた

あんなに行きたかったのに

女学校に行けなかった母の思い出の地に

自分は高校の教師としてやってきた

後の詩行で語っているのではないか。

きょうは
冷たい時雨の日
ここ五十年の間

鎌倉の海は

一体何をみたのだろう

牧葉さんの母は、女学校に行きたかったが、きつと経済的な理由で実現できなかった。それゆえに牧葉さんは、いつしか無意識に母の夢を代わりに実現したいと思っていたのかも知れない。牧葉さんの存在は、母にとつて夢を実現してくれる希望であったのだろう。気がつくとも牧葉さんは自分の生きたいようにしてきたと思っていたが、実は母の夢を生きてきたように思われてきて、その不思議な感覚をこの詩に書かざるを得なかったのだらう。自分と母との物語のように、人間は不可思議で大いなる命に促されて生きていることを「鎌倉の海は／一体何をみたのだろう」という最

2

一九九八年に刊行した第二詩集『緑のひろがり』（二十八篇）の全ては、我が子の誕生から小学校入学までを書き記した詩篇である。医師から受胎を告げられて身ごもり、激痛の中で子供を産み、いつしか言葉が喋れるようになり、自然の美しさに感動しながら、幼稚園時代を過ごし卒園し、当たり前のように小学校へランドセルを背負って出て行くまでの子供の時間を詩に書き残した。その中からタイトル詩でもある「緑のひろがり」を引用したい。

緑のひろがり

「ああー！」

あなたは わたしの自転車の前
体をのけぞらせ

頭上をさして 声をあげる
「はっば いっばい」

万緑の下

一面に広がる浅緑
黒ぐろとした枝を おおいかくし
暑い日差しが ちらちらと
涼やかな風が頬をなで

「うおおー！」

あなたは 何度も声をたて
時どき私の顔を見て

「はっば いっばい」とうれしそう

いつまでも続く 新緑の海

お父さんも ふりかえり

あなたの笑顔に ほほえみながら

広い公園の中を こぎ続ける

「はっば いっばい」
「はっば いっばい」

いつまでも いつまでも

嬰兒が一年も経つと、言葉を発する瞬間がやってくる。新緑の頃に子供を前に乗せて風を切つて牧葉さんは自転車をこいだ。その時に子供が発した言葉は「はっば いっばい」だったのだろう。子供が緑葉に感動して言葉を発する瞬間を書き記した牧葉さんは、とても幸せだったろう。言葉を発する原点とは、もしかしたらこのような自然への感動を他者である母に伝えたいという基本がなくてはならないのではないかと語っている。この詩を読んでいると嬰兒は緑語を発する子供であるかのように感じられてきた。そして「いつまでも」このように感動した事柄を率直に「はっば いっばい」と語れる人間であつて欲しいと願つたのだろう。その意味ではこの詩「緑のひろがり」

は牧葉さんの詩論と言えるのかも知れない。それは個人の最も古い記憶に立ち還り、人はそこから生を促される存在であることを語っている。また一見して子供向けのような詩作をしながら、書くことが難しい子育ての時期に、子育てをテーマにした一連の連作を書き上げるといふ組詩の可能性も試みていたのだと感じられた。

3

新詩集『黄色いマントの戦士たち』は、第一詩集が青、第二詩集が緑、そして第三詩集が黄の入っているタイトルで、推測だが牧葉さんは、生涯に七色の虹のような七冊の詩集を作りたいと構想しているような予感がする。二十七篇はIV章に分かれていて、I章の八篇は、第二詩集の自然観に満ちた詩篇群だが、その自然の危機を「水」という詩で考えようとしている。

水

荒川の上流で
利き水をした
水道水は論外だが
こくのある海洋深層水よりも
重みのある「エビアン」の水よりも
秩父の源流の水が
一番おいしい

あつさりとして
透明で
まるやかで
喉を洗い清めてくれる
幼い頃慣れ親しんだ
井戸の水
がぶがぶと冷たくて
ごくごく喉の隙間に入りこみ

ばしゃばしゃと顔も手も足も
潤った

今では

「おいしい水」はペットボトルの中
片手に持つて歩くのがファッションだそうな

「水が合う」「合わない」と言っけれど

選ぶこともできず

汚染された水を

飲むことしか許されない地域

安全な水を求めて

世界各地で起こる

「水戦争」

一杯の水

喉を潤し

命を永らえさせる

ることだ。将来へ安全な水を求めて／世界各地で起こる／「水戦争」が起こるのではないかと警告している。このまま水を汚染させていったらそのようになることは明らかだと予言的に語っている。実際に今年の三月十一日の東日本大震災によって引き起こされた福島第一原発事故は、数百km先まで国土を放射能汚染をさせてしまった。命の源である水さえ確保できなくさせた。そんな文明のあり方が、根本的に間違っていると牧葉さんは、三月十一日前に「水」という詩に込めていたのだろう。

II章七篇には、現代の教育や社会環境について牧葉さんが、自らの考えを詩に託して語っている興味深い批評的な詩篇が並んでいる。詩「非・否・卑の笑い」や「同じ笑顔」は、現代人の笑いが嘘っぽいことを指摘している。内面から滲み出した笑いでなく、作り笑いであり、また他者の荒探しをしている品のない笑いであることを見抜いている。牧葉さんは英語教師をしているが、そ

「湯水のように使う」とか

「他のものはないけれど

水ならいくらでもあるよ。」とか

今では日本でも

「死語」になっってしまったか

夏の午後

荒川の谷の流れは涼やかだ

牧葉さんの「水」を読んでいると、二十世紀二十一世紀の科学文明によって便利な生活は実現できたが、その代償として地球の生きものにとつて最も大切な原点であった水が「汚染された水」になっってしまったことに絶望に近い気持ちを抱いている。それでも清流を求めて荒川の上流で「利き水」をして、源流の味を探し求めようとすると、牧葉さんの詩の特長は、気負うことなく現代人の根本的な問題をさりげなく提示しようとしている

んな牧葉さんが「ニッポンノコトバ・日本の言葉」という詩で、まず日本語をほとんど使用しないで、カタカナの英単語だけで「ニッポンノコトバ」という詩を作り、それを本来的な日本語に戻した「日本語の言葉」という詩を作った。いかに日本語が植民地のように英語かぶれになっているかを照らし出している。この試みはとても面白いと感じた。英語教育と国語教育が別物ではなく、真に子供たちの成長においてまず母国語をしっかりと身につけない内に、外国語を中途半端に学ばせることの危険性を指摘していると思われる。そして文化の継承にとつて何が重要かを提示しているような内容を含んでいると考えさせられた。また詩「文句は何でも学校に」では、何でも悪いのは学校や教師のせいにしてしまう保護者の無責任さや内省のなさ、管理教育が進んで教師のやる気を殺いでいることを語っている。牧葉さんの詩は、このように現役の学校教師の本音で語られる勇氣ある試みでもある。それは子供たちの成長を願っ

て、保護者と真の対話ができる土壌作りを実践しているからだろう。

Ⅲ章の六篇は、家族、地域、社会全体から人間の関係性が希薄になって、コミュニティが衰退していくことの危険性を感じた詩群だ。詩「がん列島日本」の最後の二連では、〈放射能が列島を汚染しているのでは／原子爆弾の／原子力発電の／原子力潜水艦の／原因の特定には時間がかかるけれど／はつきりした時には／日本国民みんな「がん」だらけ〉と書き記している。この詩は近未来の日本を描いているのかも知れないと私は思われた。

Ⅳ章の六篇の冒頭にはタイトル詩の「黄色いマントの戦士たち」がある。この詩は東日本大震災で甚大な被害を被った石巻市にある「石ノ森萬画館」に震災前に行ったことを想起することから始まる。そこに行くまでの商店街に「サイボーグ戦士009の島村ジョー」の雄姿は溢れていた。そのサイボーグ戦士たちは大震災でも流されないも

のがあったという。その残されたサイボーグ戦士たちの記事を読むか映像を見て牧葉さんは想像力を膨らませてこの詩を書いたのだろう。「ブラックゴースト」（死の商人）と戦う宿命を持つサイボーグ戦士は、大震災後も石巻の街角を守っているのではないか。牧葉さんはこの黄色いマントのようなマフラーを翻している姿に、復興を目差す東北の人びとの姿を重ねている。そしてなぜこの詩をタイトル詩にしたのかと問うて見るなら、その答えは明らかだろう。きつと牧葉さんは不完全な技術で放射性物質を撒き散らしている「死の商人」である原発を推進する勢力とは、決して妥協してはならないと暗示しているように思われた。自分もサイボーグ009のように「死の商人」と戦わなくてはならないというメッセージを背後に秘めていると私には感じられた。それゆえその後の詩「ジェイヴィレッジ近く」では、原発マネーで作られた福島県楡葉町のサッカーコートの悲劇を記している。さらに「福島第一原子力発電所」・

「計画停電」では、今回の原発事故やその後の計画停電などをリアリズムで記述している。そして最後の詩「禁断の扉」では、原子力発電という科学技術が、地球に生息する生物を滅ぼしてしまうものであり、人類はそれを封印する「勇氣」を持つべきだというメッセージを伝えている。私はこのような日本が今おかれている切実な状況下の問題に牧葉さんのように、詩作を通して思索する試みが重要な行為だと共感を覚えた。最後にこの詩「禁断の扉」を引用したい。家族、教育、社会世界などの今日的問題を詩作しようと試みる人びと、またそんな切実な問題を抱えている多くの人びとにぜひ読んで欲しいと願っている。

禁断の扉

人類は開けてはいけないうを開けてしまった

「科学の進歩」と貼られた扉の奥には

眩いエネルギーに溢れた「核分裂」が
金貨の袋を携えて
めらめらと輝く眼で
不気味な笑みを浮かべながら
欲深く情のない者どもを
手招きしていた
それは途方もないエネルギー
彼らに
「強大な力」と「富」と「快適な生活」を
与えると思いつめた

人類は

己で制御できない物を作り出してしまった

「科学の力」で手なずけることができると
思い込んだ高慢さをせせら笑うように
「冷却水」という鎖を解かれるやいなや

暴走が始まった

白煙と黒煙を吐き出し
爆発し

やがて「透明な悪魔」となって

大気と

大地と

海に拡がり

ちっぽけな人間の力では収拾できない

恐ろしく巨大な災いを起こし

一挙に

あるいはじわじわと

あらゆる生命を

奪っていくのだ

人類は

もういい加減に

その愚かさ気付かないのだろうか

世界中に乱立する「原発」が

「地球温暖化」より先に
そしてもっと確実に

この地球と

そこに生息する生物を

滅ぼすことになることを

「豊かな生活」はだれのもの

目先の利益しか考えられない

一部の人たちのもの

他の数え切れない命と生活と引き換えに

自らの非力を知り

無知を知り

奢らず敬虔になること

自らの手に負えない「力」を

封印する「勇気」を持つこと

さあ

早くその扉を閉めて 早く

牧葉りひろ詩集 『黄色いマントの戦士たち』 葉解説文

鈴木比佐雄

コールサック社

2011